

(會員消息欄) ○理學博士三宅恒方氏傳

ミューゼウム」の如きも少しは横窓より来る光線もありましたが、大部分は上方より光線が入り来るので大變見るに都合がよくあります、以上は私が見て來ました、大體をほんの坐談的に申し上げたにすぎません。

會員消息欄

●理學博士 三宅恒方氏傳(上)

理學士 矢野宗幹

理學博士三宅恒方君逝きて尙二旬に滿たない。君の爲めに其の事蹟を明かにして置くのは後進の務であるとは思ひながら種々の事情は未だ充分に資料を集める餘日を與へない。且つ悲しみ未訴なる時に人を傳しやうとするのは公平を保たれない恨がある。殊に學界に於ける其の位置を明かにし其の業績を批判する場合には第三者の冷靜な理智の力を要求する。時期に於て人に於て私は君の傳を書くに適任とはどうしても信じられないが、只君を想ふ餘り編者の需に應じて筆を執つた。従つて年月の如き想像によつた所も多いので若し讀者にして其の誤を知られ又は傳ふ可き事蹟を知らるゝ方は私の爲めに其を書き送つて載きたい、他日何等かの方法で其を資料に詳傳を記したいと希つて居る。

一、彼の一生、

明治十三年五月二十一日石川縣金澤市水溜町に彼は產まれた。父は石川縣士族三宅恒德氏、雪嶺三宅雄次郎氏の兄君である。

明治十八年(六歲) 彼の未來を左右する昆蟲の採集は此の頃に始まつた、彼は其の頃幼稚園にあつたが從兄上村勝爾氏(今盛岡高等農林學校教授)の父は石川縣師範學校の教諭であつた關係から學校に集めてあつた標本を見做つて勝爾氏が昆蟲や植物を採集するのを見て、彼も亦昆蟲を集めた。其の頃父は東京に住し彼は祖父母と共に金澤に居た。

明治十九年(七歲) 祖父没し祖母と共に上京して牛込の父の家に親の愛に浴する身となつた。然し昆蟲を採集する事は一時止めた。

明治二十四年(十二歲) 再昆蟲の採集を始めた。

明治二十六年(十四歲) 六月二日異母妹幾代產まれた。

明治二十七年(十五歲) 此の頃麴町區番町に住し東京府尋常中學校(後の府立第一中學校)に通學した、其の二年級である。其の頃同校の教諭であつた歸山信順氏(後理學士となり明治三十九年没)が博物の研究を獎勵せられた爲めに生徒の間に熱心な研究者が少くなかつた、彼も亦其の一人で同級には鈴木正美、岩崎眞雄、神東惇、小野保吉など昆蟲の採集家が多かつた、彼は其の研究の結果「甲蟲誌」二卷を書いた。

明治二十八年(十六歲) 昆蟲雜誌第三號に「臺灣のトコジラミに就て」を書いた恐らく彼の研究を公表した最初のものであらふ、其の後此の雜誌には二三投書したものがあつた。多分此の年の事であらふ

不幸にして彼の父は臺灣の客舎で赤痢の爲めに四十歳で逝いた。彼の父は法學士で臺灣總督府に職を奉じて居たのである。未來ある父の死は其の子を一層暗くした。大志を抱ひた彼の父は家産を修めるやうな事はしなかつたので彼の一家は貧困に泣かなければならなかつた。その上幼にして生母に離れて居る彼は今又其の父を失つて全くの孤獨の悲に心を傷めた。然し彼の祖母は常に彼の側を離れなかつた叔母花圃女史の生みの親にもおとらぬ愛育が彼の心にどれ丈慰めであつたのであらふ。

彼は意を決して米國に渡り苦學しやうとしたが其は幸か不幸か事情の爲めに遂に機を逸した。其の時に彼の友人は資を集めて彼の生活を助けた事もある。哀れな境遇に置かれながら彼は苦悶の間にも決して昆蟲の研究を忘れなかつた、彼は其に依つて只其の生きる途を見出したのであらふ。



晴れたる日には採集に研究に日の暮れるも知らなかつた、雨降る日には上野の圖書館に通つて書を読み圖を寫した、斯様な努力の一年の間に十冊許の本が出来上がった。其の内の一冊は『昆蟲圖説』と云つて八百枚ばかりのものである。よく其の頃の事を語りながら人にも示した。自分の記憶は不確ではあるが其の本には志賀重昂氏の序文もあつたかと思ふ。ある本には理學博士飯島魁氏に質問した返書なども残つて居た。

明治二十九年(十七歲) 彼の熱心を見た叔父雪嶺氏は其の頃家計豊かと云ふ程でも無かつたと聞いたが資を給して彼に高等の教育をしやうと決心した。彼は私立尋常中學郁文館に入學した。彼は再入校の教育を受け得る身となつて非常に勉強した。其の頃東京動物學會で賞を懸けて動物學の研究論文を募集した、彼は平常研究して居る所を記して提出した

On Issus coleoptratus Fabs. and Coccinella 7-punctata Linn. と云ふのである。郁文館には明治十年頃から昆蟲を研究して居られた池田作次郎氏が博物を受持つて居ら

(會員消息欄) ○理學博士三宅恒方氏傳

れたので彼は種々と教へられる事が多かつた。

明治三十年(十八歳) 彼の東京動物學會に提出して置いた論文は二等賞を擬せられた(此の時一等賞は無い)若い昆蟲學者の喜は如何ばかりだつたらふ。而して其の喜に驅られて彼はまづしづかに研究に突進した彼は其の頃尙番町に居たのであつたが、友人と共に番町學術研究會と云ふ博物研究の會を開いて植物や昆蟲の研究を發表しあつて居た。

彼が二十八年頃から三十二年頃に至る中學時代に書いた書籍は前記のものゝ外「昆蟲學初步」一冊、「淡水動物學」一冊、「げんごらうむし」一冊、「昆蟲採集業話」三冊、「普通昆蟲學」一冊「Discovery on Notoconecta」一冊等がある。又ブライヤー氏日本蝶譜から産地、食草、期節等を抜き書きし其に和名を加へ産地を増補した、「ブライヤー氏日本産蝶譜附録」一冊もある。

明治三十一年(十九歳) 尋常中學郁文館を卒業した。明治三十二年(二十歳) 第一高等學校二部に入學した。其の頃からよく理學博士佐々木忠次郎氏の宅を訪ねて昆蟲の事を聞いた。始めて先生の宅を訪ねた時などは得意の昆蟲寫生圖を見て貰つて博士の冷評を貰い落膽した事もあると云ふ。

明治三十四年(二十二歳) 「初學昆蟲採集法」と云ふ小さな本を東洋社から出版した定價十五錢である。當時採集をして居た學生には喜ばれた本である。彼の公刊した

著書の最初のものである。此の年から死の時まで住んで居た赤坂區新坂町八十二番地に移つた。

高等學校では動物學を理學博士五島清太郎氏に學んだ博士の嚴格な教育が長く獨自の研究法に満足して居た彼にとつて新しい教化を齎らした事を彼は終世忘れなかつた。

明治三十五年(二十三歳) 七月第一高等學校二部を卒業した彼は直に東京帝國大學理科大學動物學科に入學した、理學博士箕作佳吉、全飯島魁、全渡瀬庄三郎の三教授について動物學一般の研究をなすと共に特に蛾類の研究に熱中した。

明治三十六年(二十四歳) 動物學雜誌に「日本産蛾類圖說」を出し初めた。昆蟲研究者にとつては其は大きな喜びであつた、此は數年間斷續した。

明治三十八(二十六歳) 七月十一日東京帝國大學理科大學動物學科を卒業した、直に大學院に入つて昆蟲學を専攻する事になつて。彼の終世の目的であり希望であつた昆蟲學の研究に一意没頭する日が來たのであつた。彼は卒業論文の爲めに前年七月から『蠅の蛹時代に於ける變化』に就いて研究して居たので其の結果を獨逸文で出した、然し其は尙續いて研究する考から印刷しなかつたもので六月の動物學會例會で其の概要を報告し動物學雜誌に其の一部を書いたのみであつた。

十一月二十八日農商務省から農事試驗場に於ける害蟲

に關する試験并調査を囑託せられ手當として月三十圓を給せられた。重に分類の方面の研究をした。

明治三十九年(二十七歳) 五月九日第一臨時教員養成所博物科講師を囑託せられた。十一月に文部省から教員免許令第三條に依り博物學科の教員たることを免許せられた。此の頃は重に鱗翅類殊に臺灣のものを研究して A list of a collection of Lepidoptera from Formosa (Ann. Zool. Jap., Vol. VI.) を出版した歐文の論文を発表した最初のものである。

明治四十年(二十八歳) 九月十八日に東京帝國大學農科大學助手に任せられ六級俸を給せられた。佐々木博士の下に研究することになったのである。十月から其頃休刊して居た日本昆蟲學會の雜誌を發行することになつて日本昆蟲學會會報の名で彼が編輯することになり翌々四十二年の一月までに十三冊を出した。彼の論文も其に四つ許出て居る。

明治四十一年(二十九歳) 十一月三十日に五級俸を給された。彼は此の頃から「シリアゲムシ」の研究を始めて居て此の年から數編の論文を農科大學紀要に出して居る。無論蛾の類の研究も採集も尙續けては居たので其の論文も此の後數年間は續いて出した。

明治四十二年(三十歳) 彼は研究の暇に獸醫學士内田清之助氏と共に Folsom の Entomology with reference to its Biological and Economic aspects. を譯し始めた。

(會員消息欄) ○理學博士三宅恒方氏傳

明治四十三年(三十一歳) 内田獸醫學士との共譯『ふるをるそむ氏昆蟲學』を警醒社から出版した。其の頃までは日本の昆蟲學界は分類の方や應用の方の本は持つて居たが一般的に純粹な昆蟲學の本が全く缺けて居たと云つてよい状態にあつたので此の本の出版が日本の昆蟲學の發達を助けた事は可なり大きいものである事と信ぜられる。彼は又蛾や「シリアゲムシ」の研究報告を出したばかりでなく「カマキリモドキ」の論文を出した。

此の年三月二十一日に河本氏安子と結婚した。彼の長い孤獨の生活からのがれて安慰に満ちた家庭を得た事が彼の研究に新しい力を與へた事は如何ばかりであつたらう。

明治四十四年(三十二歳) 彼は蛾よりもシリアゲムシの研究に没頭して居た。

明治四十五年(大正元年)(三十三歳) 十一月二十三日長女艶子が産まれた。シリアゲムシの一種の生活史の研究を完結して發表した。

大正二年(三十四歳) 十二月二十六日四級俸を給された。彼の心血を注いだシリアゲムシの論文「Bridges on the Mecoptera of Japan」を農學大學紀要で發表した此の論文になつて彼の眞價が遍く内外の學界に認められるに至つた。

大正三年(三十五歳) 四月二十二日に前年出版したシリアゲムシの論文で理學博士の學位を文部大臣から受け

(會員消息欄) ○理學博士三宅恒方氏傳

た。六月には長男恒雄が産まれた。彼は喜びに満ちて新に筆を執つて『昆蟲學汎論』の稿を起した。

大正四年(三十六歳) 此の頃彼の水彩の技が非常に進んで来た。無論幼少の頃から繪に巧ではあつたが其が多くは昆蟲の標本的の繪に費されて居たのを藝術の方面に轉じたので休暇は多くは寫生の爲めに費して居た、板倉賛治氏などはよく同行せられたが其の他此の方面の人に多くの友人を有ち、其等の會合にも出入して居た。上野の秋に彼の製作を見た人も多いであらう。

大正五年(三十七歳) 五月に彼の最愛の長男恒雄が病死した。彼の悲嘆は一通でなかつた。十月二十七日に二男恒二が産まれたけれども、産れながらに病弱であつた二男の出産は只長男の死の悲を一層重くするに過ぎなかつた。彼の心はひたすらに寂しかつた。

六月十三日農事試験場技師に任じられ高等官六等に叙せられ十一級俸を下賜せられた。農事試験場の昆蟲部の主任になつた譯である。六月二十八日附で東京帝國大學農科大學實科講師を囑託せられた。彼は林學實科と農學實科の昆蟲の講義を前から受持つて居たのであつた。六月三十日に正七位に叙せられた。

大正六年(三十八歳) 六月六日に朝鮮總督府から朝鮮に於ける各種有益有害蟲類に關する調査を囑託された、其で夏の間朝鮮各地を採集した。四月に『昆蟲學汎論』上巻稿本が完成した、六月二十日に書肆裳華房から發賣し

た。日本の昆蟲學界にあつては其を著しい出來事の一つに算へてもよいであらう。分類以外で何か知らうとすれば僅かに彼の譯書『ふるそむ氏昆蟲學』以外に外國の書に頼まなければならなかつたのに、始めて邦語の詳しい書籍を得て如何ばかり昆蟲研究者が利益した事であらう。殊に此の書の賞すべきは本邦でなされた研究を廣く引用せられた點である。

大正七年(三十九歳) 五月三十一日朝鮮總督府から勸業模範場害蟲調査事務を囑託せられ年手當六百圓を給せられた、其で其の夏再び朝鮮各地に昆蟲を採集した。十二月二十一日に高等官五等に叙せられ十級俸を賜はつた。

三月十六日 三男三郎が産まれた、彼は長男に對する想を彼に活かし得た事であらう。

此の數年來彼は實蠟科殊に蜜柑の實蠟の研究に力を傾注して其の發生地九州に折々研究に出掛けて居たのであつたが、其が今完成し 農事試験場から英文の報告を出した。シリアゲムシに對して行つた様に精緻な研究である。

大正八年(四十歳) 四月二十八日に病弱であつた二男は此の世の苦痛から去つた。

一月二十日に從六位に叙せられた。七月十五日に狩獵法施行に關する講習會の講師を農商務省から命ぜられた。九月二十二日附で東京帝國大學農學部から實科講師

を解かれ新に同學部講師を囑託せられ手當四百圓を給せられた。

彼の大著『昆蟲學汎論』下卷は十月に世に出でた。彼は病の爲めに充分に力を盡す事が出来なかつたと云つて居るが、一般は前にも増して此の書を賞賛した。彼は又前年來集めて居た『食用及藥用昆蟲に關する報告』を公にした。日本の様に昆蟲を多く食用や藥用に使ふ國では此の調査は必要で且つ趣味あるものであつた。

大正九年(四十一歳) 七月一日九級俸を下賜せられ、次いで十二月二十一日には八級俸を賜はつた。昆蟲學汎論上卷は已に第一版を賣り盡して第二版を印行した。

彼の愛妻の長く病臥した事は彼の心を暗くした。彼は其の頃から文藝的作品に其の想をやり始めた、雜誌新小説に出た、『我輩の電車觀』『瀛車觀』『私の宿屋觀』又は『大阪毎日』に出したなどの多くの讀者を引き附けたものであつた。

大正十年(四十二歳) 一月二十五日彼は不快を感じた二十八日白金の傳染病研究所に入院した。初め流感かと思つたのが「腸室扶斯」である事がわかつた。二月一日には已に意識が明かでなかつた、翌二日の午后一時にはもう呼べども答へぬ彼であつた。三日高等官四等に叙せられ七級俸を下賜せられ正六位に叙せられた。其の夜桐ヶ谷火葬場に送つた、吹雪の劇しい夜であつた。

五日午后二時青山齋場で佛式で告別式を行ひ青山墓地

(會員消息欄) ○在紐育箕浦忠愛君の音信

に葬つた。

在紐育箕浦忠愛君の音信

吉田貞雄君とは度々あちこちで出會しました、同志の士と外國で出會ふのは愉快です、本多君は此秋から「ペンシルバニア」大學に行きました、こゝは米國第一の細胞形態學の本山です。「シカゴ」は他の大學とよほど變つていて、動物學の第一線に進むものの行く處です、其覺悟でないと失望もするし、不便です、僕もあちこち見物しまじたが、實驗動物學の先頭を指揮してゐるのは、「シカゴ」の動物學であると信じます、僕は十一月十一日、五年餘も住みなれた、「シカゴ」を後にして旅行を初め「ピッツバーク」(「カーネギー」の博物館)、「ワシントン」(國立博物館、動物園其他)、「ボルチモア」(「ジョンズホプキンス」大學、大學は小さいが研究は立派です)、「フィラデルフィア」(「ペンシルバニア」大學大學は立派だが、研究は第二流博物館、動物園、「カーネギー」の「ウイスター」研究所こゝは成長に關する研究では實に立派)、「ニューヨーク」より、二十日「ロングアイランド」の實驗所に到着しました。僕のこゝに來た理由は僕の研究に對して非常に面白い研究材料があるのと、僕の研究してゐる、事柄に關して、最も關係の深い第一流の學者がある事とです、其上數ヶ年間希望してゐた處、此の度「リドル」氏が「シカゴ」に來て、是非とも來いと大に歡迎されたので早速決定したので、こゝは遺傳に關する實驗所で十人ばかりの學者が朝から晩まで研究しています、所長は此の方面の大家である、「ダーフェンポート」先生です。一寸之れ等の人々の研究題目を左に記してみませう。

1). Davenport. 氏は主として人類に關する、Eugenics の研究、2). Riddle. 氏は Sex Study であつて生理化學的研究です、3). Minoura. 氏は同じく Sex Study です、4). Banta. 氏は形態上より、Sex を研究し、又 Cave animal の研究をしてゐます、5). Little. 氏は Rat. や Mice. の遺傳の研究をやつてゐます、6). Metz & Anderson. の兩氏は Heredity の Cytological の研究、7). Belling. 氏は植物遺傳の Cytology.